

～織田信長サミット2009に向けて～



小牧山

戦国に馳せる

愛知文教大学地域文化研究センター

第11回 小牧山から岐阜、そして京都へ(2)

研究員 萩原淳也

問合せ先 文化振興課 (☎76 1189)

足利義昭上洛までの動き	
天文6年 (1537)	12代将軍足利義晴の次男として誕生する。幼名不詳。
天文11年 (1542)	近衛稷家の猶子として興福寺一乗院に入室する。のち、覚慶と称する。
天文15年 (1546)	兄・足利義藤(のちの義輝)、13代将軍に就任。
永禄8年 (1565) 6月	義輝、三好義重・松永久秀らにより殺害される。久秀、覚慶を興福寺に幽閉する。
同年7月	覚慶、奈良を脱出して近江甲賀へ。和田惟政を頼る。
同年10月	覚慶、近江矢島へ移る。
永禄9年 (1566) 2月	覚慶、還俗し義秋と称する。朝廷へ太刀・馬代を献上する。
同年8月	武田義統を頼り若狭へ移る。
同年11月	朝倉義景を頼り越前一乗谷へ移る。
永禄11年 (1568) 2月	足利義栄(義秋の従兄弟)、三好三人衆に推戴され、摂津富田(現高槻市)にて14代将軍に就任する。
同年4月	一乗谷で元服。義昭と改名する。
同年7月	義昭、美濃立政寺で信長と初対面。
同年9月頃	足利義栄、病没する。
同年9月末	義昭、信長に奉じられ上洛する。
同年10月	義昭、15代征夷大将軍に就任する。

稲葉山入城と楽市令

永禄10年8月、小牧山から稲葉山(岐阜)へと本拠を移した信長は、城下の加納市場に楽市令を発令し、自由な商業政策を推進したことが知られています。

楽市令とは、自由通行権や課税免除などを保障し、特権的な商工業集団である「座」を認めないとする法令ですが、信長が楽市令を城下のすべての市場に発令したわけではないこと、楽市令は信長により最初に始められた政策でないこと、の2点には注意を払う必要があります。

また、この頃、信長は「天下布武」印を用いだしています。

上洛への大義名分と準備

永禄10年11月、信長は、正親町天皇より禁裏領回復を命じた綸旨を受け、朝廷から上洛(京都へ上ること)

の大義名分を得ます。

その翌月に信長は、大和国の松永久秀に敵対する意志のないことを伝え、翌年2月には、伊勢に出陣し、伊勢の名族・神戸氏に3男の三七(のちの信孝)を養子に入れるなど北伊勢の守備を固め、さらに北近江の浅井長政に対しては、妹のお市を嫁がせ同盟策をとりました。

織田領国の東側には、すでに同盟関係にあった徳川家康がいましたので、これで上洛に向けての下準備を一通り完了させたといえます。

こうして永禄11年7月、越前国の朝倉義景のもとに身を寄せていた足利義昭(13代将軍義輝の弟)を美濃西庄立政寺に迎えます。信長は、朝廷からの禁裏領回復の名分に加え、義昭を供奉(推戴)することで「將軍家再興」という大義名分をも得たのでした。

足利義昭を供奉しての上洛戦

永禄11年8月、信長は近江観音寺城(現安土町)の六角承禎との交渉にあたります。これが不調におわると、9月7日に岐阜を出陣、近江に攻め入り、六角承禎・義治父子を伊賀へ敗走させ、9月26日には、義昭を供奉し上洛を果たしました。

信長と義昭は、敵対する三好三人衆の勢力を一掃すべく摂津(現大阪府)まで進軍します。またたく間に畿内を制圧し、10月14日、義昭と信長は再び京都に入りました。

義昭の將軍職就任と信長

永禄11年10月18日、義昭は朝廷より征夷大将軍に任じられます。

義昭は信長を「武勇天下第一也」と御内書(將軍の発給する書状)の書面で讃え、さらにその宛所に「御父織田弾正忠殿」と、最上級の感謝の意を表したのでした。

このとき、近江・山城・和泉・河内・摂津を望み次第領有してもよいと義昭は勧めましたが、信長はこれを固辞し、かわりに和泉の堺と近江の天津・草津での代官の設置を望みました。経済的・軍事的要所を押さえた、信長の政治感覚を示す回答であったと評価されています。

こうして短期間のうちに信長は上洛を果たし、畿内をはじめ全国にその武名を轟かせたのでした。